

グローステストの光概念に関する諸問題 II

“De luce seu de inchoatione formarum” 全訳

高岡 尚

1. この翻訳の底本には、パウアー氏の校訂版、Die philosophischen Werke des Robert Grosseteste (Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters, IX, Münster, i. W.; Aschendorff, 1912) 51頁10行—59頁3行, VII De luce seu de inchoatione formarum を使用した。訳文の欄外の〔 〕内の数字はこの版の頁を示す。
2. ()内の細字は、訳者が補ったものである。

訳

光 lux について、すなわち、諸形相の始めについて

[51]

或る人びとが「物体性」corporeitas と呼んでいるところの「物的な第一形相」forma prima corporalis は「光」lux である、と私は思う。というのは、光 lux は自体的に(ほかの力の助) per se 自分自身をあらゆる部分へと拡散し、その結果、遮蔽物が妨げない限り、光の点 punctum lucis を起点として、いくらでも大きな光の球 sphaera lucis が瞬時にして生み出されるからである。

さて、物体性はいかなる寸法 dimensio にも欠けている。なぜなら、物体性から必然的に「質料の三次元的な広がり」extensio materiae secundum tres dimensiones が結果するが、両方とも、つまり物体性も(第)質料も「自体的に単純な実体」substantia in se ipsa simplex であるからである。しかし、「自体的に単純であり寸法 dimensio を欠いている(物的な第二)形相(物体)」forma in se ipsa simplex et dimensione carens が、「同様に(物体)単純で寸法を欠いている(第)質料」へと、どの部分に向かっても寸法を導き入れることが可能であったのは、あの形相(物体)が、(1) 自分自身を多重化すること、(2) 瞬時に自分をすべての部分へと拡散すること、(3) そして自分を拡散することによって(第)質料を広げること、これらのことによる以外には方法がなかった。なぜなら、(1) 形相は質料から分離されえないがゆえに、また、(2) 質料自体が形相から排泄され evacuari えないがゆえに、形相自体が質料を見捨てることはありえないからである。

しかるに、光 lux は、この活動、すなわち、自分自身を多重化してすべての部分へと瞬時に拡散せしめるという活動が自体的に所属するところのものである、ということを私は先に述べた。

それゆえ、この(自己拡散)活動をするものは何であれ、(1) 光 lux それ自体であるか、あるいは、(52)(2) 「これ(自己活動)を自体的に行なう光 lux それ自体」を分有する限りにおいてこの(自己拡散)活動を行なうものであるか、である。それゆえ、物体性 corporeitas は、(1) 光 lux 自体であるか、あるいは、(2) 光 lux 自体を分有し、光自体の力によって働く限りにおいて上述の(自己拡散)働きを行ない、(第)質料へともろもろの寸法を導入するところのものであるか、である。しかしながら、第一形相が「自分自身に続く形相(形相の)」の力によって(第)質料へともろもろの寸法を導入することは不可能である。それゆえ、光は物体性それ自体に続く形相ではなく、物体性そ

れ自体である Non est ergo lux forma consequens ipsam corporeitatem, sed est ipsa corporeitas.

その上, (1)「物的な第一形相」は, それに続くすべての形相よりも優れている。(2) それは, (それに続くすべて)より卓越したより高貴な本質を所有している。(3) それは, 「分離して自存する諸形相」formae stantes separatae に(それに続くすべて)よりいっそう類似している, と賢者たちは言っている。しかるに, 光 lux は, 物的なものどもすべてよりもより優れた dignior, より高貴な nobilior, より卓越した excellentior 本質を所有しており, 「知性実体 intellegentiae という分離して自存する諸形相」にすべての物体よりもよりいっそう類似している。それゆえ, 光は, 物的な第一形相である Lux est ergo prima forma corporalis.

それゆえ, 第一質料の中に創造された第一形相である光 lux は, (1) 自分自身を自分自身であらゆる場所へと無限回多重化しながら, また, (2) (自分自身を)すべての部分へと均等に押し広げながら, (3) 置き去りにすることができない(無)質料を自分と共に離散させながら, それを「世界という機械」mundi machina が存在しうるだけの量にまで, 時の始めにおいて広げたのである。

また, アリストテレスが De caelo et mundo (De mundo 天論 I. 5~7) において示したように, 単純なものは有限回多重化されても量を生み出しえないがゆえに, (時の始め)光 lux の有限な多重化によって(無)質料の「広がり」extensio が生じることができなかつた。しかし, (大前)単純なものは, 無限回多重化されれば有限な量 finitum quantum を生み出すはずである。なぜなら, 或るもの(A)の無限な多重化から生じる生産物は, この生産物が(無限)多重化によって生産される際の「多重化されるもの」(A)を無限に超えるからである。しかるに, (小前)単純なもの simplex は単純なものによって無限に超えられることはなく, 有限な量 finitum quantum だけが単純なものを無限に in infinitum 超える。なぜなら, 無限な量は単純なものを無限回 infinities 無限に infinite 超えるからである。——それゆえ, 「自体的に単純なものである光 lux」が無限回多重化される時, 「同様に単純な(無)質料」を有限な大きさに所属する(三つ)次元へと広げることが必然である。

ところで, 数の(無)無限な加算 aggregatio は(他の)無限な足し算 congregatio に対して〔I〕どんな数的な比 numeralis proportio においても〔II〕どんな非数的な比 non numeralis proportio においても関わりをもつことが可能である。また, 他の無限どもよりもより多くの無限どもが存在するし, 他の無限どもよりもより少ない他の無限どもも存在する。

〔I〕(数的な比における関わり) (1) 偶数と奇数のすべてを加算したものは無限である。それはまた, 偶数のすべてを加算したものよりも大きい——後者もまた無限ではあるけれども——。なぜなら, 前者(偶数と奇数のすべて)は後者(偶数のすべて)を奇数のすべてを加算したものだけ超え出ているからである。また, (2) 1から始まる数(1, 2, 3, 4, ...)を連続的に2倍して加算したものの $(\frac{2+4+6+\dots}{8+10+\dots})$ は無限である。同様に, これら2倍の数 $(\frac{2}{8}, \frac{4}{10}, \frac{6}{12}, \dots)$ に対応する $\frac{1}{2}$ 倍の数 $(\frac{1}{4}, \frac{2}{5}, \frac{3}{6}, \dots)$ をすべて加算したのも無限である。これら $\frac{1}{2}$ 倍の数どもを加算したものの $(\frac{1+2+3+\dots}{4+5+6+\dots})$ は, この数ども(数ども)の2倍の数どもを加算したものの $(\frac{2+4+6+\dots}{8+10+\dots})$ に対して $\frac{1}{2}$ 倍であるはずである。(3) 同様に, 1から始まる数を3倍してすべて加算したものの $(\frac{3+6+9+\dots}{12+15+\dots})$ は, これら3倍の数に対応する「これら3倍の数の $\frac{1}{3}$ 倍の数 $(\frac{1}{4}, \frac{2}{5}, \frac{3}{6}, \dots)$ 」をすべて加算したものの $(\frac{1+2+3+\dots}{4+5+6+\dots})$ に対して3倍である。(4) こうした関係は同様に, 数的な比 numeralis proportio のすべての種類について明らかである。なぜなら, そ

れら(数的な比)のどれに基づいても、有限なものが無限なものに対して比をもちうるからである proportionari potest finitum ad infinitum。

〔II〕(非数的な比における調わり)しかし、1から始まる数を連続的に2倍してすべてを加算したものが無限であり $(\frac{2^1+4^1+6^1+8^1}{10+\dots=\infty})$ 、また、これら2倍の数に対応するその $\frac{1}{2}$ 倍の数をすべて加算したものが無限であり $(\frac{1^1+2^1+3^1}{1+\dots=\infty})$ 、さらにまた、 $\frac{1}{2}$ 倍の数を加算したのものから「1」、あるいは、どれか有限な数が除去されるならば(これは $\frac{2^1+3^1+4^1+\dots}{1+\dots}$ ある)、除去が生じるやいなや、第一の加算 $(\frac{2^1+4^1+6^1}{8+\dots})$ と第二の加算の残り $(\frac{2^1+3^1+4^1+\dots}{1+\dots}$ ある)との間には「2倍の比関係」dupla proportioは存在しないことになる。いや、どんな数的な比も存続しないことになる。なぜなら、もし(数列)より小さい側の端から(数を)除去することによって「数的な比」から「他の数的な比」が残されるとすれば、「除去されたもの」は、それが除去されるもとのものの何分の1の部分であるか、あるいは、何分のいくつかの部分になる必要があるが、しかし、有限な数は無限な数の何分の1の部分であることも、何分のいくつかの部分であることもできない Numerus vero finitus numeri infiniti aliquota vel aliquot aliquotae esse non potest からである。それゆえ、「 $\frac{1}{2}$ 倍の数どもを無限に加算したもの」から或る数を除去するならば、「2倍の数を無限に加算したもの」と「 $\frac{1}{2}$ 倍の数を無限に加算したものの残り」との間には、「数的な比」は残存しないことになる。

これらがこのような関係にあるがゆえに、光 lux が、何であれ相互に関わり合う比——すなわち、数的な比と非数的な比——に基づいて、自らを無限に多重化することによって(数)質料をより小さい有限な寸法とより大きい有限な寸法へと広げることが明らかである。すなわち、もし光 lux が自らを無限に多重化することによって(数)質料を2クビットの寸法へと広げるならば、光 lux は、同じく自らを2倍の無限に多重化することによって(数)質料を4クビットの寸法へと広げるし、また、同じく自らを $\frac{1}{2}$ 倍の無限に多重化することによって(数)質料を1クビットの寸法へと広げる。さらに、同じようにして、光 lux は(数)質料を他の数的な比と非数的な比に基づいて広げる。

これは、思うに、万物が原子 atomi から構成されていると説く哲学者たちの理解であり、立体が面から構成され、面が線から、線が点から構成されるという哲学者たちの理解であった^[54]。また、この見解は、大きさはもろもろの大きさからのみ構成されると説く見解と矛盾しない。なぜなら、部分が言われる言い方と同数の言い方によって全体が言われるからである。例えば、(1) 2倍されると全体をつくる「全体の部分」は、他の言い方では半分 medietas と言われる。(2) 非有理数倍されると対角線をつくるが、有理数倍されると対角線に超えられるような「対角線の部分」は、他の言い方では辺 costa と言われる。(3) 直角 angulus rectus の部分は他の言い方では「偶然の角」angulus contingentiae と言われる。「偶然の角」は直角の中に無限回存在するが、しかし、直角から有限回引き去られると直角を小さくする。(4) 線の部分は他の言い方では点と言われる。点は、線の中に無限回存在するが、線から有限回引き去られる場合、線を小さくすることはない。

さて、私は、私の話に立ち戻って言いましょう。光 lux は、自らを無限に多重化することによってあらゆる部分へと等しくなるがゆえに、(数)質料をあらゆる場所に等しく球形に広げる。そして、その広がり必然性から、(数)質料の最も外の部分は中心に近い最も内の部分よりもより多く広がりより多く稀薄になる、ということが帰結される。また、最も外側の諸部分が最高に稀薄になったとき、内側の諸部分はまだより大きな稀薄化を受け入れうるであろう。

それゆえ、光 lux は、前述の仕方によって第一質料を球形に広げるとともに、最も外の諸部分を最高度に稀薄化しながら、最も外の球において^(第2)質料の可能性を完全に補完した。そして、^(第2)質料がそれ以上に押し広げられることを受け入れる可能性を残さなかった。このようにして第一物体が球の最外部において完成されたのである。この「第一物体」は「堅い殻」firmamentum と言われ、自らを構成するために第一質料と第一形相だけしか所有していない。それゆえ、それ^(第2)は、本質と最大な量とを構成する諸部分に関して最も単純な物体であり、「自らの中で^(第2)質料が第一形相だけによって補完されていること」によってのみ物体という類から異っている。他方、これやあれやの諸物体において成り立つ物体という類は、自らの本質の中に第一質料と第一形相を所有しているけれども、^(第2)「第一形相によって^(第2)質料が補完されること」から引き離し、「第一形相によって^(第2)質料が縮減せしめられること」diminutio materiae per formam primam から引き離している。

このような仕方で「堅い殻」firmamentum という「第一物体」が完成されたのであるから、それ^(第2)は、自らの光 lumen を自らのあらゆる部分から全体 totum の中心へと広げる。なぜなら、光 lux は「第一物体」の完全性であり、自然本性的に自分自身を第一物体から多重化するがゆえに、必然的に光 lux は、全体の中心へと注ぎこまれるからである。この光 lux は、自らを第一物体から注ぎ出すとき、^(第2)質料から分離しえない全的な形相であるから、自分と一緒に第一物体の「質料の気息性」spiritualitas materiae を広げる。このようにして「気^(第2)息的な物体」corpus spirituale あるいは、むしろあなたが「物的な気息」spiritus corporalis と言いたいものである光 lumen が第一物体から進み出る。この光 lumen は、自らが移動するにあたって、自らがそれを通して移動するその物体 corpus を分割しない。それゆえ、この光は第一の天の物体 corpus primi caeli から^(第2)中心まで瞬時に通り抜ける。また、この光 lumen の移動は、天から^(第2)中心へと瞬時に移動する「数的に一なるもの」aliquid unum numero と理解されることがかりにあるとしてもそのようなものではない——なぜなら、このことはおそらく不可能であろうから——。むしろ、光 lumen の移動は自らを多重化することと光 lumen を無限に生成することによるのである。

それゆえ、光 lumen 自体は、第一物体から中心へと伸びて集まるとき、第一物体の下位に存在する量的なもの moles を集めた。そして、第一物体は、すでに完成されたものであり不可変的なものである限りもはや減じられることが出来なかったがゆえに、また、場所は空虚になりえなかったがゆえに、必然的に、^(第2)量的なものが集合する過程において量的なものの最も外側の諸部分が広げられ分離せしめられた^(第3の球)。このようにして、上述の量的なものの最も内側の諸部分においてはより大きな濃密性 densitas が生じ、また、最も外側の諸部分においては稀薄性 raritas が増大した。また、^(第2)量的なものを集める光の力 potentia luminis および、集めるときに分離させる光の力は、第一物体の下位に包含されている量的なもののあの最も外側の諸部分を最高度に稀薄化 ad summum subtiliare et rarefacere する程に大きかった。こうして、上述の量的なものの最も外側の諸部分において、「第二の球」sphaera secunda が生成し、その向こうで^(第3の球で)受容されうるいかなる圧力 impressio によっても補完されないものとなった。^(第2)第二の球の完成と完全性は次の通りである。すなわち、光 lumen は第一の球から生み出される、そして第一の球においては単純 simplex である光 lux は、第二の球においては二重化 duplicata されている。

さて、「第一物体から生み出された光 lumen」が第二の球を完成し、第二の球の内側に更に

濃密な量 moles densior を残したのと同様に、「第二の球から生み出された光 lumen」は第三の球 sphaera tertia を完成し、第三の球の内側に集合化によってなおいっそう濃密化される量 moles adhuc densior を残す。そして、この順序にしたがって分離する集合化 congregatio disgregans が進み出て、九個の天球 novem spaerae caelestes が完成され、四元素の質料であるところの濃密化された量が最下位の第九の球の内側に集合化されるに至ったのである。

しかるに、「月の球」 sphaera lunae である「最下の球」は、自分自身からも光 lumen を生み出し、自らの光 lumen によって (1) 自らの下位に含まれている量を集め、(2) 集めることによってあの量の最も外側の諸部分を微細化し分離させた。しかし、この光 (月の) lumen の能力 potentia は、あの量 (月の球の下位に) (含まれている量) の最も外側の諸部分を集めることによって最高度に分離させるのに十分ではなかった。それゆえ、この量 (月の球の下位に) (含まれている量) のすべての部分において不完全性および「集合作用と分離作用を受け入れる可能性」 possibilitas receptionis congregationis et disgregationis が残留した。|そして (1) この量の最上の部分は、最高度には分離されなかったが、^[56]しかし分離によって「火」 ignis となり、なおも諸元素 (空、土) の質料であり続けた。この元素 (火) は、自分自身から光 lumen を生み出しながら、自らの下位に包含されている量を (全体の中心) 集めながら、その最も外側の部分を分離させたが、しかし火そのものの分離は (自らの) (包含される量) よりも少量であった。この元素 (火) はこのようにして火を造り出した。ところで、(2) 火は、自分自身から光 lumen を生み出して、(火) 下位に包含されている量を集めながら、その量の最も外側の諸部分 (火) を分離したけれども、その量の分離は (火の球の下位に) (包含されている量) よりも少量であった。このようにして火は空気 aër を造り出した。(3) 空気も、自分自身から「気息のな物体もしくは物體的な氣息」 corpus spirituale vel spiritus corporalis を生み出して自分の内側に包含されているものを集め、集めることによってその外部のものどもを分離しながら水と土 aqua et terra を造り出した。しかし、水の中には分離する力よりも集まる力がより多く残留していたので、水も土と共に重いまま残留した。

つまり、この仕方では、この可感的な世界の十三個の球が存在へと造り出された。それらはすなわち、(1) 完成されたものとして、変化しえないし、増大もしえないし、生成もしえないし、消滅もしえない九個の天球、および、(2) 未完成なものとして、(九) 反対の仕方では存在するところの、変化しうるし、増大しうるし、生成しうるし、消滅しうる四つの球である。——そして、「自分から生み出される光 lumen」に基づいてより上位にある物体はすべて、後続する物体の種 species であり、それ (火) を完成するものであるということは明らかである。また、可能性によって 1 が「後続するすべての数」であるのと同様に、自らの光 lumen の多重化によって第一物体は、後続するすべての物体である。

さて、「大地」 terra は、上位のもろもろの光 lumina を自分の中に集積しているがゆえに上位の物体どもすべてである。それゆえ、大地は、詩人たちによって「パン」 Pan すなわち「すべてのもの」 totum と言われているものである。また、同様に大地は、あらゆる物体の中で最も圧縮されているがゆえに、サイコロ cubus すなわち 固体性 soliditas によって Cybele——いわば「サイコロのようなもの」 cubile——と呼ばれている。すなわち、大地は、すべての神々の母なる Cybele と呼ばれている。なぜなら、大地の中には上位のもろもろの光 lumina が集められてはいるけれども、しかし、大地の中でそれら (火) が自らの働きによって生じたのではなく、むしろ、あなた (Cybele) が望みさえすれば、どの球の光 lumen であろうと大地から現実態および働き actus et operatio へと引き出されうるからである。こうして、いわ

ば或る母である大地から神々の中のどの神でも生み出されるであろう。——ところで、「(第一の天と大地との間に存在する)中間の諸物体」media corpora は次の二つの関係の中に置かれている。すなわち、下位の諸物体に対してそれらは、「第一の天」caelum primum が残りのすべての天に関わるような仕方に関わり、上位の諸物体に対してそれらは、大地が他のすべての天に関わるような仕方に関わっている。このように何らかの仕方、それら(中間の諸物体)のどの物体の中にも残りの物体どもすべてが存在している。

物体どもすべての種であり完全性であるものは光である species et perfectio corporum omnium est lux。しかし、上位の物体どもの種であり完全性であるものは「より気息的で単純な光」magis spiritualis et simplex (lux) であり、下位の物体どもの種であり完全性であるものは「より物的で多重化された光」magis corporalis et multiplicata (lux) である。〔57〕

どの数も、1 unitas から出てより大きなあるいはより小さな多重化によって数えられるにもかかわらず、同じ種に属するとは限らないように、どの物体も、光 lux から単純なものとしてあるいは多重化されたものとして simpla vel multiplicata 発出したのであるが、だからといって同じ種に属しているとは限らない。

この議論において、(1)「万物は一なる光の完全性によって一なるものである」omnia esse unum ab unius lucis perfectione とする人たちの意図、および、(2)「多であるところのものどもは、光そのもののさまざまな多重化によって多である」ea, quae sunt multa, esse multa ab ipsius lucis diversa multiplicatione, とする人たちの意図は、おそらく証明されたと思う。

ところで、下位の諸物体が上位の諸物体の形相を分有するとき、下位の物体は、上位の物体と同じ形相を分有するがゆえに、上位の物体が動かされる動力 virtus motiva と同じ「非物的な動力」virtus motiva incorporalis からの運動を受け入れる本性を所有している。それゆえ、一日週期の運動によって第一の最上位の球を動かす「知性実体あるいは靈魂の非物的な力」virtus incorporalis intelligentiae vel animae は、下位の諸天球すべてを同じ一日周期の運動によって動かす。しかし、下位の諸天球はより下位のものである程それだけ弱くこの運動を受け入れる。なぜなら、天球がより下位になる程、その天球の内部において「物的な第一の光」lux prima corporalis が、より純粋さを失ってより弱くなるからである。

しかし、諸元素 elementa (火: 空気) は第一の天の形相 (光) を分有しているにもかかわらず、第一の天の動者 motor (彗星) から一日周期の運動によって動かされることがない。諸元素はその第一の光 lux prima を分有してはいるけれども、「第一の動力」virtus motiva prima (彗星) には従わない。なぜなら、(イ) 不純な、弱い、第一物体におけるあの光の純粋さから遠ざかってしまったこの光 lux を所有しているからであり、(ロ) 抵抗と不従順の根源である「質料の濃密性」densitas materiae をもあわせて所有しているからである。しかし、或る人びとは、火の球が一日周期の運動によって回転すると言い、彗星の回転をその印として提示している、また、この(第一の天)運動は海水にまで及ぼされるために、これ(第二の天)から海の流が生じる、とも言う。しかしながら、正しく哲学的に思索する人びとはみな、土はこの(第一の天)運動から解放されている、と言っている。

同様に、「第二の球」——これは上に向かう数え方に従って数えられて、「第八の球」と言わ

れるのが普通である——の後の諸球もまたすべて、あの第一の天の形相 *forma caeli primi* を分有するがゆえに一日周期の運動を所有するが、このほかに自らに固有のものとして所有している自らの運動(順行逆行を繰り返して感ずる運動)において共通するところがある。

しかし、これらの諸天球は、すでに完成されているがゆえに、稀薄化あるいは濃密化 *rarefactio aut condensatio* を受け入れることができない。それゆえ光 *lux* は、それら(第三の第三…)において質料の諸部分を稀薄化するために中心から(外側)に向けてそれら(質料の諸部分)を動かすこともなく、また、それらを濃密化するために(外側)中心へ向けてそれらを動かすこともない。それゆえ、これら諸天球は、上方への運動を、あるいは、下方への運動を受け入れることはできな(58)いが、「知性的な動力」*virtus motiva intellectiva* による円運動 *motus circularis* だけは受け入れることができる。なぜなら、知性的な動力は、物的に視線を自分自身へと投げ返すので、これら諸天球を物的な回転によって円運動させるからである。

しかし、あの諸元素は、完成されておらず、稀薄化可能であり濃密化可能であるがゆえに、それらの中に存在する光 *lumen* は、それらを稀薄化するために中心から(外側)動かすか、あるいは、それらを濃密化するために(外側)中心へと動かす。それゆえ、それらは本性上、上方への、あるいは、下方への運動が可能である。

しかし、諸物体の中で最も単純である「最上位の物体」においては、四つのもの、すなわち、「形相」、「質料」、「(形相と)合成作用」、「合成体」、*forma, materia, compositio, compositum* が見出される。

(1) 「形相」は、最も単純なものである限りにおいて一性の地位をえている。

(2) 「質料」は、(i) 自らの二重の能力のゆえに、すなわち、もろもろの圧力に耐える能力 *susceptibilitas impressionum* と、それらを受け入れる能力 *earumdem receptibilitas* のゆえに、(ii) また、第一に根源的に「2」*binarius* によって生じる質料自体に根本的に所属する濃密性 *densitas* のゆえにも、正当に「2」の本性をえている。

(3) 「合成作用」*compositio* は、「3」*ternarius* を自らの中に保有する。というのは、それ(合成)において、(i) 「形相化された質料」*materia formata* と (ii) 「質料化された形相」*forma materiata* と (iii) 質料とも形相とも別であり、おのおのの合成体 *compositum* において第三のものとして見出されるところの「合成作用の特性」*compositionis proprietates* が明らかであるからである。

これら三つ(形相・質料・合成作用)とは別な特性をもつ「合成体」*compositum* というものは、「4」という数のもとに把握される。

それゆえ、すでに明らかなように、第一物体の中には潜在的に他の諸物体が存在しているがゆえに、第一物体の中には「4」が潜在的に存在し、それゆえにまた、他の諸物体の数も、「10」を超えない仕方で根的に *radicaliter* 見出される。なぜなら、形相の「1」*unitas*、質料の「2」*binarius*、合成作用の「3」*ternarius*、および合成体の「4」*quaternarius* が加算されると、「10」*denarius* を構成するからである。それゆえ、世界の球という物体の数は「10」である。というのは、(四つ)元素どもの球はたしかに四つに区分されているけれども、しかし、それらは可消滅的な土的本性 *natura terrestris corruptibilis* の分有によって一であるからである。

以上によって、「10」が宇宙の完全数 *numerus universitatis perfectus* であることは明白で

ある。というのは、「全的であって完全なもの」*totum et perfectum* はすべて、自らの中に「形相と一性」のような或るものと、「質料と2」のような或るものと、「合成作用と3」のような或るものと、「合成体と4」のような或るものを所有しているからである。また、これら四つのものを超えて第五のものを付加することは生じえないからである。それゆえ、「全的で完全なもの」はすべて「10」である *omne totum et perfectum est decem*。

以上によって、これら 1, 2, 3, 4, の四つの数において見出される五つの比 *quinque proportiones* だけが、合成作用および「すべての合成体を安定させる調和」に適合することが明らかとなる。それゆえ、この五つの比だけが音楽的なもろもろの拍子、身振りおよび、リズム⁽⁵⁹⁾的な時間に合致するのである。(完)

この翻訳は室蘭工業大学教授・大出 哲先生のご指導によってできたものであります。ここに先生に深く感謝を申し上げます。

— 1984年4月20日 —